

最近数週間の戦争の状況

戦場でのもっとも重要な出来事として、おそらくオーストリア・ハンガリー軍のイタリア軍への攻撃を挙げることができよう。わが同盟国は、チロルから進攻してイタリア軍を幾度かの戦闘で圧倒し、いくつものその強力な陣地から駆逐し、数万人の捕虜を捕らえ、数多くの銃砲を獲得した。勇敢な同盟国軍の兵士が28センチ榴弾砲を15門獲得したことは、イタリア軍がその「名人級」の退却をどれほど急いでいたかを証明するものである。最新のニュースでは戦闘はまだ終止したわけではなく、オーストリア軍は前進を続けている。

イタリアの戦場の地図を眺めてみると、誰でも、どれほどの素人であろうと、オーストリア軍の成果がこの進軍全体にとってどんな意味があるか理解できるにちがいないであろう。残りのイタリア陣地の背後、イタリア陸軍の最大部分への物資搬入路と戦術的な退却路を脅かすものであるから

だ。

この約束破りのイタリア人が今逆境にいるというニュースにはおそらくわれわれ全員、喜びの感情がわき起こったことだろう。われらの思いはこの勇敢な同盟軍の元に馳せ、彼らがイタリア軍へその裏切りに対して十分な報いを与えてやってくれればと願う。その地形的な性質だけから生まれている自然の障害は非常に大きい、これまでに得られた成果は、われわれを良い気分にしてくれるものである。

西部戦線では戦闘の嵐が止まない、とりわけヴェルダンでは従来と同様激しい戦闘が続いている。少しずつ、陣地をつぎつぎにフランス軍は失っている。304高地の陣地とその先がわが手に落ち、キュミエールをフランス軍から奪い取った。ドウオーモンではきわめて激しい戦闘が行われた。フランス軍は一時的にこの要塞を押さえたが、わが軍の反攻によってすぐに放り出してしまった。パリではこのニュースには非常に興奮したことであったろう。ロイター電によると、先にパリではドウオーモン制圧の祝賀会があったそうだから。

しかし、ヴェルダンだけで戦闘が行われたわけではなく、ドイツ軍はさらにその北方にも進攻した。そしてイギリス軍からヴィニーとジヴァンシーの高地で重要な陣地を奪い取ることに成功した。

東部の戦場は比較的静かである。ロシア軍はドイツ軍からの攻撃にそなえているが、まだ始まっていない。そのような攻撃が計画されているのか、またいつなのかについては無論われわれは知らない。

ブルガリア軍がギリシア国境を越え、サロニキ方面に向かっているというニュースは興味深い。敵国の新聞はわが方とギリシアの間に問題が生じるに違いないという印象を煽ろうとしている。しかしそれは正しくなく、ギリシアとわが方との間にはこの件に関して完全な合意が形成されたと確信をもってよい。願わくば、サロニキで敵に対して第二のガガリポリをもたらすことができれば、と思う。

図書室

図書目録が出されて、先週の初めから使用に供されて以来、図書室にはつぎつぎに寄贈があった。まずは収容所の中から。横浜の救援委員会からも少数の図書の送付があった。これらの新しい本は目録が完全なものとなるように、補遺に記載されている。

これらの中の良書をいくつかここに挙げておく。

V. シェッセル	『エッケハルト』
グスタフ・フライターク	『借方と貸方』
L. ガングホーファー	『バックスの女信者』
R. ヘルツォーク	『ハンザ同盟市民』
レオ・トルストイ伯	『戦争と平和』
R. スコウロネック	『嵐の兆候』
R. スコウロネック	『大火』
W. ラーベ	『タンネのエルゼ』
L. トーマ	『天国の郵便秘書』
H. サイトー	『日本史』
Th. ルーズヴェルト	『山奥の森の王国』
L. ガングホーファー	『東部の前線』
L. ガングホーファー	『ロシアの崩壊』
P. O. ヘッカー	『わが出陣の先頭で』
フォン・ミュッケ海軍大尉	『エムデン号の冒険』
パウル・ロールバッハ	『世界市民に』

さらに現代ドイツの教科書が何冊か、たとえば

ハイトマン博士	『文学論授業の教科書』
---------	-------------

本の貸し出しは、特に告知のない場合、一週2回で、水曜日と土曜日の1時から1時45分となっている。

借出し者相互の本の交換は許されていない。

収容所展望

5月が終わった。風は強く、雨は少々。だが結構涼しくて気分よく過ごさせてくれた。どの旗竿にも、丸い口をした布製の鯉が重たげに揺れている。どの鯉も、そのほかでかさで他の鯉を凌ごうとしている。野外では小麦と大麦が実りを迎え、学校の井戸ではもう井戸さらえが行われている。収容所の花壇も、庭師の期待に時として応えないものもあるが、華やかになってきている。たくさんのヒナたちがおいしそうに育ってきている。数人の犬の愛好者が、ふたたび新たな犬を育てている。この犬どもはすでに、夜の犬の遠吠えコンサートでも個々に区別できる声を身につけようとしている。カブトは相変わらず、衛兵のラッパに合わせてとてもすてきな遠吠えをしている。彼は、もともと暮らしていた中学校よりも収容所の方が落ち着くらしい。歩哨たちは夜中、彼を相手に銃剣の訓練をしているらしく、立て続けに2回、ひどい刺し傷を受けていた。運動場では走路がきれいになり、周りに観客席が作られた。近々、そこで自転車競争が行われるのだろう。われわれが行っているファウストバルとシュラーバルは、観客がますます増加している。少年たちがときどき一緒にやりたくなるようだ。小さなちびたちが、大きなファウストバルの球を追いかけて打とうとするが、周りの人たちから笑いを誘って、大きな球がゲーム中に見るほど簡単には扱えないことを思い知るのである。ゲームの他に体操も熱心に行われていて、身体を動かすことにかけて全く不足はない。精神的な栄養については、新設の図書室でたっぷり取ることができる。本棚にずらりと並んでいる様子は、まさに堂々たるものである。別荘地はまたまた大きくなった。建築を予定しているものは急がないと、もうすぐ建築できる場所が全部なくなってしまう。シュレーダー司祭が水曜日（5月31日）、収容所内でミサを執り行った。彼は収容所に積極的な関心を示し、お役に立てることは、できる限り何でもするとおっしゃっている。

キリスト昇天の祝日に、中津峰の北斜面にある観音寺への一日がかりの遠足が行われた。午前6時半、素晴らしい陽光のもと出発した。那賀川ま

では、所々まずまずの田舎道と、大麦畑と田んぼの間の面白みのない平野の中を進んでいった。農民たちは大麦を刈り取ったり、稲の苗植えのために田んぼを準備しているところであった。那賀川¹沿いに、立派な杉と松の林の中、数多くの墓に囲まれて丈六寺という寺がある。ここは封建時代、すなわち武士の時代に戦場であって、寺院の脇の建物の一つでかつて、ひとりの大名が殺されたこともあるそうだ。この寺から道は、最初小さな丘の連なり沿いに、それから両岸に竹の生えた濁れ川沿いに進み、その後谷を横切って高い中津峰山系の麓に向かってまっすぐ進んだ。深く切れ込んだ谷からは小川がさらさら音を立てて流れていた。その傾斜を利用して、米つきの水車はいくつかあった。道はほどほどの傾斜で寺の方へうねうねと上っていく。ほとんど常に日陰になっていた。たいてい、対岸斜面の暗い鬱蒼とした森と灰色の岩壁を見通すことができた。多くの参拝者たちを追い越していったが、たいていは女性で、途中にある観音像すべてにお供え物をしていた。2つの踊り場のある急な階段を上ると、寺の真ん前に出た。寺は立派な針葉樹が日陰を作る台地に建てられている。一番の興味を引いていたのは8.8cmの観音で、日清戦争のときの戦利品だ。もうひとつ、高い一本杉に刻まれた観音像も言及に値するものだ。像は1mほどであろうか。木の方はそれでも成長を続けている。山上では思い切り休息する十分な時間があった。ここまでの所要時間は3時間半だった。近くの滝までの寄り道は、それだけの価値があった。約20mの高さから、比較的強い水流が泡立ちながら周囲を緑に囲まれた暗い岩壁を澄んだ水をたたえた滝壺に流れ落ち、岩がごろごろある所を下の谷の方へとざあざあと流れ下っていくのである。昼からは空に雲が出てきたので、帰り道には日焼けを心配せずにすんだ。こうして全員、割合元気に収容所に到着した。私は最初、この遠足が行き帰りにはかなり長時間歩かねばならないので、参加する気はほとんどなかった。しかし後になってみると、行ったことを嬉しく思っている。遠足はこれからも常に、私にとって楽しい思い出となるだろう。

1 これは勘違いしている。実際には勝浦川。

ティーネンのドイツ軍水兵

リエージュとブリュッセルを奪取した後
軍がフランスに行ったとき、
大胆不敵なベルギー人の軍勢が
リエージュを襲おうとした

闇夜に北から駆けてきた
徒歩の者 8000、騎乗するものも
慎重にレーヴェンで方向を変え、
東へと進んだ

そこには多くの大砲もあり
王自身も行軍に加わっていた
「ドイツ人の鼻柱をへし折ってやる」
こうして朝方ティーネンを眼前にしていた

「ドイツ人の一群がやって来るぞ。
青い上着に白いズボンだ。
総勢 800 人もいないぞ」
これはドイツ軍の水兵だった

カレーに通じる道だったので、彼らは考えた
「これからイギリスをとっちめに行こう
ところが敵が何とも間近にやって来た
では、これ以上歩くには及ばないな」

すぐさま生け垣や建物に身を潜め
「たとえ一人に 10 人来ても
ここで踏ん張るぞ。死んでも引っ張り出されんぞ
リエージュには人っ子ひとり通しはせぬ」

3日間、多勢に無勢の闘いが吹き荒れた
ベルギー軍は是が非でも押し通ろうとした
昼には襲いかかり、夜には忍び寄った
だがどうやっても成功しそうになかった

彼らはドイツ軍に砲火をさんざん浴びせてきた
見ることも、息をつくこともできないほどだった
「どうしても死ぬんだったら
溺死の方がましだった

ここでは死に神はまずいことをしてくれる
死ぬかどうかは問題じゃないんだ
灰色の海の大波の中で死にたいだけなんだ
砂の上なんてごめんだ」

三日間が過ぎてベルギー軍は理解した
絶対勝つことがないことを
大砲と車を置きざりにして
こっそりそこから逃げ去った

海から風が吹いてきて
フランダースの上に雲が広がると
墓から船乗りの歌がわきあがる
私も他の多くの者もそれを聞いた

「さあ、グラスを手にとれ
我らはまだこんなにも若い
兄弟よ、イギリスへ行かなくては、
イギリスに向かわなくてはならない」

ヴィル・フェスパー

スポーツ週間

スポーツ週間はもともと本日、6月4日の日曜日に決められていた。残念ながら、本日は広場で自転車競走があるため、競技の開始を今月6日の火曜日に延期せざるをえなくなった。

第39回演奏会（1916年6月4日）

1. 「プロイセンの栄光」 M.A.K パレード行進曲 ピーフケ
2. 「婚礼の合唱」、歌劇『ローエングリン』より ワーグナー
3. 歌曲「汝が胸で夢を見させよ」 クラジンスキー
4. ワルツ「アンナ、いったいどうしたの」 ファル
喜歌劇『愛しいアウグスチン』のモチーフによる
5. ツーステップ「花の乙女」 ヴェンリヒ
天気が良ければ、コンサートを庭で催します。

開演4時

精霊降臨祭コンサート（1916年6月11日）

1. ビョルネボルガネス行進曲
1808年時代の古いスウェーデンの行進曲
2. 「森の郵便」、トランペットとオーケストラ シェーフエ
3. ワルツ間奏曲「甘い思い出」 ジーデ
4. 「鉛の兵隊のパレード」キャラクター・ピース イェツセル
5. 行進曲「公園の兵士たち」 モンクトン

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 113 問の解答

- 1) Dh8-a8 Kf4 x e4
g5 または Tb7
2) Sc4 - e3 任意の手
Lg1 - c3 詰み

第 114 問の解答

- 1) Dh5 - e8 Kd3 - c4
2) De8 - b5+ Kc4 x b5
3) Ld1 - c2 詰み

- 1) Lg2 - f3
2) Dc8 -b5 + Kd3 - e4
3) Ld1 - c2 詰み

- 1) Lg2 x d5
2) Dc8-b5+ 任意の手
3) Db5-b1 詰み

- 1) 上記以外の任意の手
2) De8 - a4 任意の手
3) Da4 - c2 詰み

第 115 問

白 : Kb4, Dg4, Tc1, a7, Lh1, Sf8, Bd4, c5

黒 : Kd5, Te4, f5, Sg3, Bf6

2 手詰め

第 116 問

白 : Kg2, Dc2, Le2, c1, Sd7, Bb2, d2, h3, h4, d5, g5

黒 : Kf4, Ta2, a6, Lf2, Bb4, b5, c5, e6, h6, g7

3 手詰め

勝つのは誰か（最終回）

イギリス自体でも生じていた雰囲気の変化がいかに大きかったかを示すのは、イギリスの指導的医学専門誌である有名な『ランセット』が最近おこなった発言である。『ランセット』は正直に、もし四カ国連合側が戦争に負けることになるならば — それはつまりすでに可能性の範囲にあるものと捉えられていたわけだが — その成功の大部分はドイツの学者のおかげである、と述べている。1866年と1870年には、ドイツの教師が戦争を勝ち取ったと言われた。今度はそこがドイツの学者に代わったのである。こう『ランセット』は言う。この発言は、いまイギリスでも真実の状況がおぼろげながら感じられていることを実証している。

もしイギリスがふだんやっている以上に世界史を巡り歩いていたならば、人間の数と富は確かに重要な要件ではあるには違いないが、決して勝利を決定づける要件ではないという事実の前に気づいていたに違いない。むしろ歴史が教えるのは、勝利するのは常に精神であるということだ。さもなければ、ちっぽけなオランダが、補助物資を無尽蔵に有する巨大なスペイン帝国相手の戦いを何十年にもわたって行い、最終的に勝利することはできなかっただろう。また、さもなければ、どうしてフリードリヒ大王がオーストリア、フランス、ロシア、スウェーデンおよびドイツ帝国の連合軍に対して勝利を収めることができただろうか。オランダとフリードリヒ大王を勝利者ならしめたのは卓越した精神なのであり、フランス革命軍が強大な連合軍に勝ち誇れたのも精神の力によるのである。

上記の『ランセット』の発言に特徴的なことは、このことへの理解が今やイギリスでもきざし始めているということである。これはイギリスだけのことではない。パリでは、有名な外科医であるドワイアン教授がソルボンヌで数ヶ月前行った公開講演で、フランス人の科学と科学の代表的人物に対する無関心を嘆き、それとドイツの大学での卓越した科学的業績とドイツ国民の科学に対する全般的な関心を対比して見せた。ドワイアン教授

は野次り倒されて、それ以上話せなくなってしまったが、真実は野次によっても、話を中断させても消えるものではない。イギリス、フランスの次にロシアでも同じ声が出ている。ロシア人学者のサン・イレール氏は『リェーチュ』紙上で、ロシアには有能な人がいないと嘆いている。「とりわけ技術者、医者といった職業人が不足していて、それは国民啓蒙省が帝国行政の最下位にあることから予見できたことなのだ。まさにドイツ人が非常に優れている領域で、わが国の専門家の力が足りない。近い将来西ヨーロッパに依存しないようにするのに、十分な数の物理学者も化学者も、そもそも全く科学の専門家というものがいない。もちろん実用科学ではわれわれは、ドイツ人ほど発展できない。それはロシア人の性格にはなじまないのだ」。

中欧諸国と四カ国連合の精神的な仕事での相違は実際驚くほどだ。ドイツ人の場合、重火器、飛行機、飛行船の技術的優位性は驚くべきものがある。敵からも称揚される国民的力の有機的連携、戦争医学と戦争衛生の信じられないほどの成果、最後にその科学、とりわけ硝石、食料タンパク、フェロマンガンの申し分のない代替物質を見つけ、またまさに合成ゴムの問題を解決し、ドイツをジュートに依存しないようにしようとしている化学の輝かしい業績がある。相手はどうだろう。イギリス政府はイギリス人経営の染色工場を創業するために2,000万ポンドの補助金を保証した。今日でもこれらの工場はほとんど使用できないような耐久性のない染料しか作れない。従来ドイツから供給されてきた薬品の代替品は、これまで四カ国連合のうちのどこでも少しでも近いものができるわけではない。ドイツでは50ないし85ペニヒの値段となるアスピリン錠の小瓶がイギリスでは現在22シリングもするのである。最後にサー・ウィリアム・ラムゼー氏の主張を取り上げよう。かれは一年前、ドイツは木綿輸入を絶たれたら1キロの火薬も生産できなくなるだろうと予言したのだ。サー・ウィリアム・ラムゼーのような学者が本当に、ドイツでは化学を学ぶ大学1、2年生でも知っている、1グラムの木綿も必要としないニトロ化製造法があること

を知らなかったのだろうか。そんなことはほとんど信じられない。それともサー・ウィリアムは、知っているくせに先の主張を述べたのは、ただただイギリス政府に法規に反して木綿を戦時禁制品と宣言する口実を与えるためであったのだろうか。

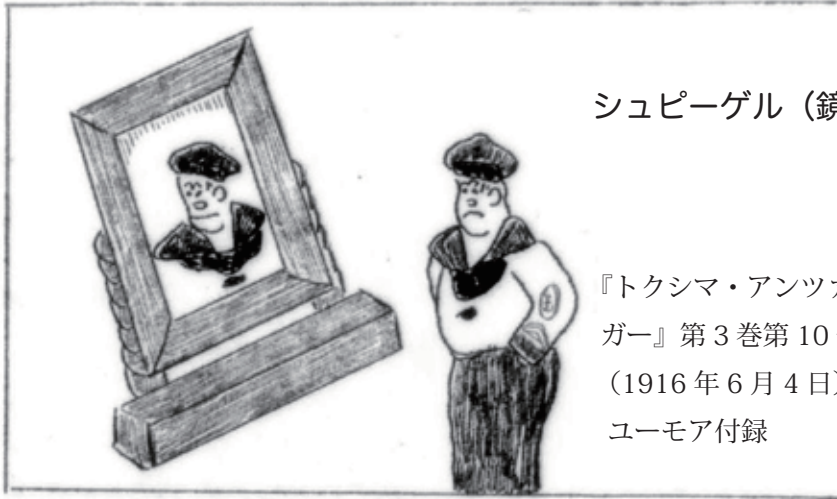
世界史の戦争を勝取るのは精神であり、今の戦争はその精神がドイツ側にあることを示したのである。

ヴェルダン（その1）

（「テークリヒェ・ルントシャウ」紙より抜粋）

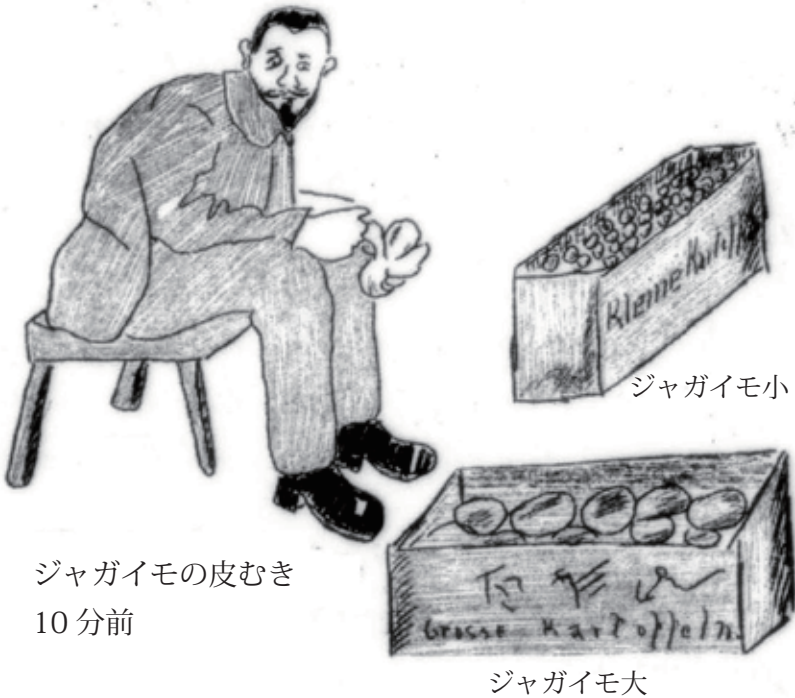
ヴェルダンへの攻撃はわが国大参謀本部の戦術と戦略の名作であることがますます明らかとなっている。戦術からみると、この攻撃は前年のフランス軍の凶暴なナポレオン式突破作戦とは基本的な違いがある。そちらは幅広い前線が攻撃対象となり、膨大な兵と弾薬が投入されるが、つねに同じく膨大な損失がついて回った。一方ドイツ側の攻撃では、比較的小さな、慎重に選ばれた区間での徹底的な砲兵隊の準備を順次行っていった。したがって集中的で、より効果的な砲撃効果が可能となっている。ドイツ人の精神様態にのっとり、わが軍はゆっくりと秩序だて、一步一步前進する。このことは要塞が堅固な場合に必要なことなのだ。わが軍は、秋のシャンパーニュの戦闘での衝動的なフランス軍とはちがひ、戦いの勝敗を一撃で決めようとは思っていない。敵の陣地をひとつひとつ潰していき、過大な損失を避けているのである。これに対し敵は、防御側に立っているにもかかわらず、長い前線ではなく、徹底的に狭い区間に集中した砲火で必然的に重大な損失をこうむっているのである。

つづく



シュピーゲル (鏡)

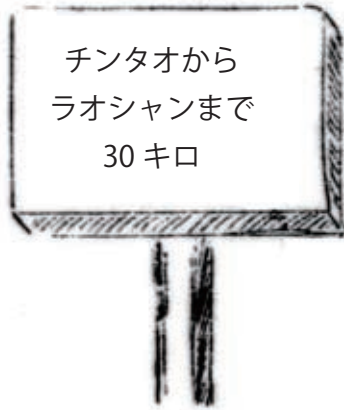
『トクシマ・アンツァイ
ガー』第3巻第10号
(1916年6月4日)
ユーモア付録



ジャガイモの皮むき
10分前

ジャガイモ小

ジャガイモ大

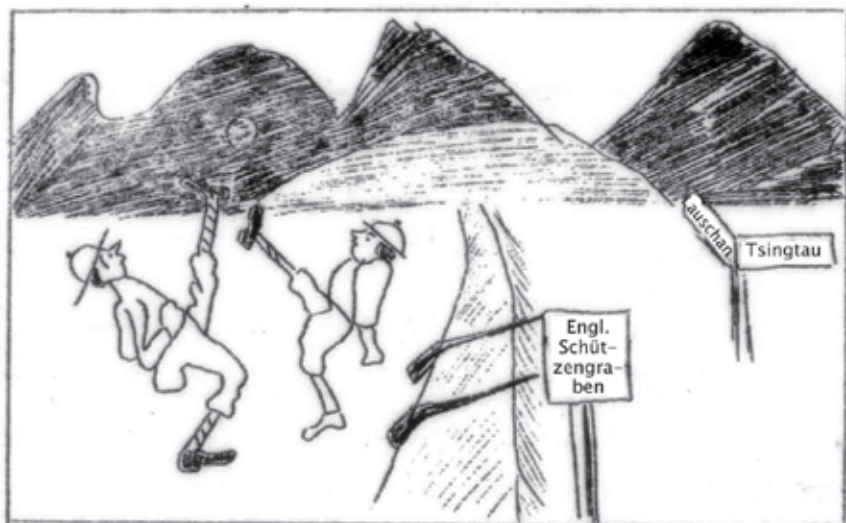


チンタオ

チンタオのホテル連合会のイギリス人会長が宣伝書類を送ってきた。

そこには海水浴場としてチンタオが美しく、優れている点が美々しく述べられていた。

特に取り上げられているのは、戦場と破壊された要塞への遠足である。われわれは観光客、主にその中のイギリス人に特に、「光栄あるイギリス陸軍」が嵐の夜に潜んでいた塹壕への遠足を薦めたい。むろんこの遠足は自動車でないといけない。だから夜あまりに帰りが遅くならないように早朝早くに出発しなければならない。その代わり、参加者は労山を同時に見るという利点がある。



カドルナ将軍の名誉心

ベルギー、フランス、イギリス、ロシア、セルビアの軍が華々しく退却した後、彼はこの面でも自らを賭けてみた。しかし残念ながら、この最初の賭けで2万人ほどが捕虜となり、かれらの持つ大砲と機関銃を失ったので、大きな成功に同国人と同盟国人に沸き立った喜びも、水をかけられた。

イタリアではただひとり、完全に幸せだった男がいる。未解放地方担当大臣²だ。というのもオーストリア軍が1キロ前へすすむたびに彼の管轄区域が広がるからである。かれはこうしてやがてはイタリアの大臣の中で最重要人物になることを望んでいる。

2 イタリアは「未回収の土地」の獲得を旗印にしていた。

ずるがしこい奴

(扉絵参照)

ジャガイモの皮むきというのはくそいまましい仕事だ、特にこいつが小さいときには、と誰かが最近考えた。こやつの上等な頭脳に機知あふれる考えが閃いた。

厨房の使者が現れて、担当班ジャガイモ2箱の皮むきを、さあすぐに仕事にかかれ、と号令をかける前のこと。10名で2箱。つまり5人で1箱だ。皮むきのまえにジャガイモをより分けておこう。小さいのを一方に、大きいのをもう一方に。大きい方は箱をすぐに一杯にする。つまりそれだけ早く片付く。ずるがしこい奴はもちろんこっちの方に座り……5分早くすんでほっとする。とても暑くて、人が言うには「アフリカが一杯」だったそうだ。